

巻頭言 「逃れる鳥」

宇野 元

70年代のわんぱくたちは、スティーブ・マックイーン映画が大好きでした。「大脱走」。「荒野の七人」。「パピヨン」は満員の映画館の立ち見で。今も胸のなかにラストシーンが残っています。断崖絶壁。ダスティン・ホフマンが扮する親友と別れをつげ、救命具をほうり投げ、みずから飛び降りる。青い海に浮かびあがる。「おれは生きてるぞ！」そう叫んで遠ざかる彼の姿。それを眺めながら、なんともうなずく親友。おや？ 海中に人影が。気づいたか、マックイーンを下でダイバーが支えていたよ、と仲間と話題にしました。映画を制作する側も観る側もおおらかな時代でした。

無実の罪をきせられて離島へ。自由をもとめて脱出しては捕らえられ、それでも諦めずに脱出を試みる。そしてついに自由を得る。心に響くのは、日常の歩みにも苦しきがあるからでしょう。自由への求めがあります。私のジョギングのスタート場所であり、ゴールでもある白橋。息を弾ませながら山手幹線から下り、最後の短い上り坂を駆け上がります。橋の上はひろい空が。ひととき、命の躍動をおぼえて小声で口にします。「おれは生きてるぞ！」。

聖書は、私たち人間の囚われの現実を掘り下げてみつめ、それだけまた、囚われから解放される幸いをイメージ豊かに語ります。仕掛けられた網から逃れる鳥の比喻をもって。

仕掛けられた網から逃れる鳥のように

わたしたちの魂は逃れ出た。

網は破られ、わたしたちは逃れ出た

詩編 124, 7

大きな危機を逃れて、大空を舞う鳥の自由。鳥はそれを感謝し、喜びを歌う…… 喜ばしく、しかも気高い自由、困難な状況において私たちが賜る大胆な自由が示されています。

神が、私たち人間と作ってくださる歴史は、ダイナミックなものである。困難、危険がある、私たち自身の内側にも危うさがある、しかしたえず、守られる。空を飛ぶ鳥が示すイメージに、このことが重ねられます。神の恵みは、囚われ人に自由を与える。